視聴覚室の運営と資料

—ビデオ・カセット・テープの特性—

Management of the AV Library.

東京女子医科大学図書館

堀江 幸 司*

I はじめに

近年、医学図書館においても情報伝達媒体としての視聴覚資料に関心が高まってきているが、視聴覚資料が持つ所謂、教材としての性格から、図書館員は視聴覚資料をどのような形で図書館に受け入れ、整理するかと言うことでその判断に迷い、また、視聴覚資料そのものについての把握にも乏しかったと言える。しかし、最近では図書館に備え付けるに相応しい視聴覚資料もでてきているし、医学図書館においても、医学教育との関連から、視聴覚資料に無関心ではいられなくなってきた。そこで、本稿ではこの視聴覚資料にスポットをあて、視聴覚室の運営とビデオ・カセット・テープの特性について述べるが、本論に入る前に、その前提として「図書館視聴覚室の性格」について、考えておきたい。

II 図書館視聴覚室の性格

図書館に視聴覚室を持つと言ってもその性格は、いろいろあると思う。まず本稿を読まれる方々に、自館内に視聴覚室と称されるものがあるとすれば、どのような視聴覚室を持っているかを考えていただきたいと思う。筆者は次のような3種類の視聴覚室を考えてみた。

① 視聴覚教材センターとしての視聴覚室。

大学における視聴覚センターとして、全学の視聴覚機材、資料を集中管理することにより、全学的な規模での視聴覚ライブラリーとして機能するもの。場合によっては内部発生的な資料、たとえば教員の自作のスライド、X線フィルム等の整理、管理も行ない、教員の要求に応じて利用に供すると言ったことも含まれる。このような視聴覚ライブラリーとして視聴覚室が機能する場合には視聴覚資料、機材についての全学的な目録を完備する他、

人員の面でも完全な独立の体制をとる必要があろう。

② 図書館内に授業等のための設備として視聴覚室を持つ場合。

図書館が主に授業のために、視聴覚室の「室の管理」及び「機材の管理」のみを行なう場合であって、図書館資料としての視聴覚資料を積極的に収集していない館にこのような視聴覚室を持つ傾向が強い。たとえば、映写室として、又は語学用のL.L.教室として図書館内に視聴覚室を持つ場合である。視聴覚室を新設する場合には特に注意して、視聴覚室が単なる機材置場や授業のために使われる部屋としてではなく、図書館資料との関連で視聴覚室を持てるように努力すべきである。

③ 図書館資料の一形態として視聴覚資料を購入しそれを管理・運営するために図書館内に視聴覚室を持つ場合。

②の場合にはあくまで授業が中心となるので、個人の利用は充分制限される。視聴覚資料の利用は計画的に行なわれることも多いので、この点非常に不便である。この③の場合には、個人的な図書館利用者がその利用の中心となるので、授業の場合等どうしても図書館の視聴覚資料が必要な場合には、図書館内視聴覚室から資料を貸出して利用してもらうことになる。このような利用の体制を整えるためには、学内に授業のための別の視聴覚教室を設置することが必要となろう。図書館資料の一形態として購入すると言うことは、予算的にも視聴覚資料費として計上することであって、図書館独自の立場で資料を収集することを意味する。この場合、カリキュラム専用に使われる教材は原則として収集しないことになる。

以上のような3つの視聴覚室が考えられるとは思いますがこの3つの場合がいろいろに重なり合って、各館独自の視聴覚室を管理・運営していることと思う。女子医大の場合はこのうちの③の場合の視聴覚室を図書館事務室内

*Koji HORIE : Tokyo Women's Medical College Library

に設置している。(20m² 10名程度収容)

Ⅲ 視聴覚資料の収集・整理・管理・利用

Ⅲ-1. 収集について。

視聴覚資料は、①簡易視聴覚資料(絵画・写真等)、②映像資料(スライド・フィルム等)、③録音資料、④印刷媒体に付属するもの(テキスト付のもの)、⑤マイクロフィルム資料に分けられる¹⁾が、一般的に視聴覚資料と言った場合には、このうちの⑤を除き、娯楽的なものと教育的なもの(教材的なもの)として捉えることができるだろう。医学図書館の場合には当然、教育的な立場から収集することになる。又、視聴覚資料とくに教育的なものについては、「市販資料」と「自作資料」が考えられるので、どの範囲で図書館に受け入れるかを明確にしておく必要があろう。女子医大の場合には、前述のⅡ-③のような視聴覚室、つまり図書館資料の一形態として視聴覚資料を購入するような視聴覚室を設置しているので、その立場にそって「市販資料(編集されているもの)」の範囲で収集している。視聴覚資料の一面である娯楽的な面と医学以外の教育的な面については、他機関を利用することになっているが、図書館では「日比谷図書館」、「新宿区立中央図書館」と団体登録を行なっている。女子医大に具体的にどのような視聴覚資料があるかと言うと156本のビデオ・カセット・テープが中心となるが、その他、スライド、X線フィルム、レコード(心音図等)などがある。このスライド、X線フィルムについても内部発生の資料は扱わず、解説書を伴って編集されている資料を収集している。

Ⅲ-2. 整理について—保管・目録、分類—。

視聴覚資料の整理についてはどの館でも悩みの種だと思うが、まず視聴覚資料の形態の相異から、それぞれの視聴覚資料の形態に合った保管容器を必要とすることが問題であろう。一般の単行書の場合には、書架を購入すれば保管できるが、視聴覚資料の場合にはそれぞれ専用の保管容器が必要となる。女子医大の場合には収集の中心がビデオ・カセット(3/4インチ幅のもの、外装25.3×17×3.4cm)であるので、ガラス戸付の書架があれば良いのであるが、16mmフィルムも、8mmフィルムも、レコードも、スライドもと、多種の形態の視聴覚資料を扱っているような所では、それらの収納スペースを確保するだけでもまず容易なことではあるまい。女子医大の場合にはスライドの保管のためには「スライデックス」を使用しているが、このスライド専用収納ケースのお蔭で大分

スライドの整理に役立っているが、それでも大分スペースを取るので、スライドの収集についてはある程度の制限はやむをえないと考えている。視聴覚資料の整理については、以上述べてきた保管としての整理の他に資料の中味としての分類・目録としての整理が考えられると思う。視聴覚資料の目録については、種々の文献にも指摘されている通りに、一般単行書以上に内容に関する詳しい目録を取ることが望ましいと思う。特に映像資料については、その内容目録のみがその中味を知る手がかりとなるので、できるだけ詳しく目録をとっておくことが必要であろう。つまり、一般図書の場合には、その本をばらばらめくってみればその本が必要なものかどうかの判断がつくが、映像資料とくにロールフィルム形態のものについては、もし内容目録が完備されていなければその内容をタイトルで判断するか又は、いちいちフィルムを映写機にかけて判断するしかない。これでは非常に時間の浪費であるし期待はずれに終わる可能性もある。映像資料における内容目録の重要性は、雑誌のマイクロフィルム化における冊子形態のCumulative Indexの重要性を考えてもらえれば、おわかりいただけると思う。視聴覚資料整理担当者は、ご苦労でもフィルムは一応全部みてその内容目録を作成しておくことが必要であろう。女子医大の場合、ビデオ・カセット・テープの内容目録については、ビデオ・テープの外装ケースに内容のアドレス番号を示して利用の便に供している。スライドの整理についてはMeSH(Medical Subject Headings)を付けて整理する方法²⁾もあるが、スライドの利用そのものが余り頻繁でないし、女子医大の収集方針としてテキスト付のものを集めているので、そこまで手間暇かけて整理する必要はないと考えている。視聴覚資料は、比較的新しい媒体であるので、全国の医学図書館の中でも系統的に整理している所はほとんどないようである。女子医大が医学図書館協会加盟館に対して行なったアンケート調査³⁾の結果でも明らかのように、視聴覚資料の整理は各館独自の方法で行なっている所が大部分である。確かに視聴覚資料はその形態の多様性から「特殊資料」には違いないが、その利用については、最近の医学教育の現状から考えても単に「特殊資料」とは考えられなくなってきた。医学図書館においても、視聴覚資料をいつまでも「特殊資料」扱いにしないで、一般の図書同様の扱いができないものかと思う。このような姿勢をまず図書館員が持たなければ、視聴覚資料の有効性を利用者に知ってもらうことはできないであろう。もちろん研究者

の視聴覚資料に対する理解も必要なことではあるが。このような視点にたつて視聴覚資料をみるとき、その整理についても、何か統一性を模索する方向に進んでゆくのではなからうか。

＊ ＊ 女子医大視聴覚資料整理のポイント ＊ ＊

①テキスト（解説書）が付いているもの（たとえば、Ciba Collectionのスライド）は、テキストを中心に考え、スライド等はその付属物として扱う。テキストは一般単行書と同様に分類（NLMC、NDC）し、目録をとる。スライド等はテキストと一緒に視聴覚室内に配架する。

②ビデオ・カセット・テープについては、受け入れ番号で分類を示し、内容はアドレス番号とともにビデオ本体の余白に記入しておく。

③目録カードは通常のカード枚数の他に視聴覚室内にも一枚おく。

④女子医大の視聴覚資料の受け入れ、整理の流れ。

Ⅲ－3. 整理について。

女子医大では、0.5人分の人員を割いて視聴覚資料の整理、視聴覚室の機材・資料管理を行なっているが、今後増々視聴覚資料が増えてゆくことを考えると、この人員配置では間に合わなくなるかも知れない。しかし、他館でも専任の職員を配置しているところがほとんどなく他の係と兼任している館が26館と圧倒的に多いことを考えると、そうわがままも言えないかも知れない。女子医大の場合もそうなのであるが、視聴覚室の使用申し込みを閲覧カウンターで行なっている館では、視聴覚室担当者とカウンター係が連絡を密にとっておかなくとも思わぬ事故を引き起こすことも考えられるので、十分注意する

ことが必要である。又、女子医大の場合、視聴覚室の利用案内については入学時の図書館オリエンテーションに組み込んでいるが、細かい機材の使用方法については、実際利用するときに説明している。なにしろビデオ・テープ一本で3万円から5万円はするので、一つの誤操作でとんでもない損害となってしまう。そこで使用説明には充分すぎる位の態度でのぞむことが必要である。女子医大の図書館には16mmの映写機がないので今の所あまりその恩恵を感じていないが、16mm映写機を図書館で管理しているところでは、係員は「16mm発声映写機操作講習修了証」を取得しておくことと良いと思う。この修了証を所持する者がいないと、公立視聴覚ライブラリーを利用することができないからである。この講習会は各区の教育委員会の主催で行なわれている。

Ⅲ－4. 利用について。

女子医大での視聴覚資料の利用は、視聴覚室内で行なうことを原則として貸出しは行なっていない。しかし授業などでどうしても必要な場合は、学内への貸出しは認めている。学外で利用できる視聴覚資料を有する機関については、大阪大学中之島図書館の調査⁴⁾もある。女子医大には佐藤記念館内に大学の視聴覚教室があるが、図書館内に視聴覚室を新設する以前には、この視聴覚教室を教務課、医用技術研究施設（医技研 現在、医用工学研究施設と改称）、図書館の三者で、管理・運営していた。しかし、この佐藤記念館と図書館との位置の関係および個人での利用は、医技研の医療技術者養成カリキュラム又は語学の授業のないときに限られるなどの制約から、なかなか円滑な運営ができないのが実情であった。

視聴覚資料の受け入れ、整理の流れ

そこでは非図書館内にも視聴覚資料とくにビデオ・カセット・テープを使ってグループ学習をする部屋がほしいとの要望が出されていた。医学部学生はセミナー等でグループ学習する機会が多く、ビデオ・テープを利用して医学各分野の包括的な知識を吸収したいとの要望が強かったのである。そこで図書館内に視聴覚室を昭和50年8月に新設することとなり現在に至っているが、今では看護婦・薬剤師等の利用も多く、当初の予想以上に好評である。利用者のために閲覧カウンターに視聴覚資料形態別リストを置き、「図書館月報」にも新規受け入れ資料については掲載しているが、主として利用される視聴覚資料は、本学医技研で製作したビデオ・カセット・テープである。

Ⅳ 視聴覚資料におけるビデオ・カセット・テープの特性について

医学教育においてはスライドの利用が盛んに行なわれているが、自作教材の視聴覚資料としては確かにスライドが優れているように思う。まして「Panacopy」なるものができスライド(マウント付)が手がかるに作成できるようになってからは、その利用は一段と進んでいるように思う。しかし、図書館で扱う視聴覚資料としては $\frac{3}{4}$ インチ幅のビデオ・カセット・テープがより優れた資料であると思う。以下、ビデオ・カセット・テープの特性について述べる。

① 機材が取扱い易い。

ビデオ・カセット・テープに使用する機材は、ビデオ・カセット・プレーヤー(若しくはレコード・プレーヤー)と専用のカラーモニターテレビ(一般のチューナー付のテレビでも良いが、ビデオ・テープしか再生できないモニター・テレビの方が図書館での利用には向いている)があれば良く、その操作方法も一般のカセット・テープ・レコーダーとほとんどかわりがないので、16mm映写機のような面倒さはない。16mm映写機も最近はイメージローディング方式になっているので、フィルムの装てんは随分楽になっているが、それでもオープン・テープとしての扱いにくさは残る。又、ビデオ・カセット・テープの場合、 $\frac{3}{4}$ インチ幅のテープ使用のものについては各メーカーとも規格が統一されているので、どのメーカーの機種を購入しても互換性がある。しかし、最近家庭用としてよく宣伝されている $\frac{1}{2}$ インチ幅のものについては、ソニー方式(ソニー、東芝、三洋電気、パイオニアなど=ベータ連合)とビクター方式(ビクター、松下、

日立、三菱、シャープなど=VHS連合)があり、統一規格がないので注意を要する。医学教材用として市販されているビデオは、すべて $\frac{3}{4}$ インチ幅のものであるので問題はない。ビデオの操作が簡単であると言うことは、誤操作によっては簡単に映像が消えてしまうと言う危険性を含んでいる。そこでビデオの機材を購入する際には、自館の要求にあったものの中で、誤操作のもとになるような複雑な機構の付いていない、最も操作がしやすい単純なものを選んだ方がよい。女子医大では現在、再生専用のビデオ・コーダー(SONY VP1100)と専用モニターテレビ(SONY PVM2020)を使用している。静止再生(Pause)ができるものなどは画面を傷つける原因ともなるので避けた方がよい。

② 学生のグループ学習に向いている。

医学部学生になるとグループ学習をする機会が多くなるが、ビデオ・カセット・テープはその際の利用に最も効果を発揮する。女子医大での利用も、勿論個人での利用も多いが、このようなグループでの利用に予想以上の反響を呼んでいる。医学教育の補助手段としてビデオ・テープ程優れた教材はないと思う。医学教育には視聴覚的要素を伴うことも多く、そのような場合にはビデオ・テープは驚くほどの効果を発揮する。しかしこのように価値あるビデオ・テープを恒常的に製作・提供するためには、莫大な予算的裏付けが必要であることも考えておかなければならぬ問題であろう。

③ テープの整理・保管が容易である。

ビデオ・カセット・テープは、スライド等とくらべるとその扱いは遙かに容易である。スライドの場合は、専用収納ケースを購入してそれにファイルするなどの方法を講ずる必要があるが、ビデオ・カセット・テープ($\frac{3}{4}$ インチ幅)は形状が一般の図書と同じ様であるので、一般の書架にファイルすることが可能である。しかし、一般の書架にファイルすることができると言っても、一般閲覧室に他の図書と混排することは避け、別置もしくは図書館内視聴覚室に湿度対策などを構じた上で、保管することが望ましい。しかし、殆どの館には空調の設備があると思うので、保管条件についてはそれ程神経質になることもない。

④ 映写のために広い部屋を必要としない。

16mmフィルムや8mmフィルムを映写するためには、ある一定以上の大きさの部屋を必要とするが、ビデオ・テープの場合には、テレビと同じことなので、10名程度の人が入る部屋があれば十分である。16mmや8mmの場合は

部屋が大きい程スクリーンを拡大してみることも可能であるが、ビデオの場合はモニターテレビの大きさによって画面は一定してしまう。テレビ一台につき、せいぜい10名程度しかカバーできないので、大多数での利用には何台かのモニターテレビを各所に配置する必要が生ずる。図書館と言う限られたスペースと利用対象として個人又は小グループを考えた場合には、ビデオ・テープは最も有効な映像媒体と言える。

⑤ 部屋を暗くしないで利用することができる。

ビデオ・テープの場合はテレビであるので、部屋を暗くしないで利用することができる。これは当然のことなのであるが、このことは図書を参照しながらグループ学習を進めてゆく場合には、意外と重要なことである。スライド、16mm、8mmをスクリーンに映写してみるとときには、部屋を暗くする必要があるので、スクリーンに対する集中力は増すが、テキストを見ながら学習をすることができないと言う欠点がある。この点、ビデオは明るい部屋で開放的な気持ちで学習を進めることができ、機材の操作性から考えても最も進んだ映像媒体と言えるだろう。スライドを使って授業する場合には、部屋の一部分の照明はつけておくなどの配慮は是非必要である。

⑥ 機材の移動性が考えられる。

最近の技術の進歩に伴って1/2インチ幅テープを使用する小型のビデオもでてきているので、機材を移動して利用することも不可能ではなくなってきた。確かにこのようにハード(機器)を移動することによって、利用者は自分の都合の良い時間と場所でビデオを利用することが可能となるが、それを実際に実行するためには管理・運営・予算等、解決されなければならぬ問題が多い。現在のところは、視聴覚室内で利用し必要に応じてソフト(資料)のみを貸出することが一般的であるし、それが図書館として実行可能な範囲であると思う。このソフトにしても3/4インチのテープそのものを貸出すのではなくてできれば1/2テープにCopyしたものを貸出すようにした方がテープ管理上、望ましいと思う。この場合は利用者が図書館と同じ方式の1/2テープの再生機材を所有していることが前提条件となる。以上の解決方法として図書館視聴覚室内に何台かのビデオ専用のブースを設置することが考えられるが、既存の図書館ではなかなかそれだけのスペースを確保することはむずかしい。しかし、ビデオ・テープが数多くの利用者(卒後教育も含めて)に効果的な価値を持つことを考えると、ある程度の個人用ブースを持つことは、前向きに検討する必要があるだろう。こ

れから視聴覚室を新設するところでは、是非考えていただきたい問題である。

⑦ 何回もくりかえしてみることができる。

ビデオ・テープが他のフィルム資料と比較して最も効果的な点は、テープを自分でコントロールしながら、必要な箇所を反復することができる点であろう。しかし、反復も特定な箇所だけを何度もくりかえすとテープをいためる危険性があるので良くないが、このようなテープの反復利用は、16mmフィルムや8mmフィルムではできないビデオ・テープ独自の利点である。つまり映像を自分の理解のペースに合わせて納得するまでくりかえしみることができると言うことであって、この点、教室での教材としても大変利用しやすい資料形態と言えるだろう。

以上、簡単にビデオ・カセット・テープの特性についてふれたが、ここに述べた以上にビデオ・テープは利用範囲の広い魅力ある情報媒体である。

V お わ り に

医学教育におけるテレビの利用に関する公式の報告は1947年に行なわれているが、それは Johns Hopkins Medical and Surgical Association の学会で閉回路テレビシステムで、750人の学生および医師に外科手術を見せたものであった。⁶⁾ それ以後1965年までにアメリカの半数以上の医学校が教育にテレビを導入し、卒後教育にもテレビを取り入れるようになってきた。このような映像による医学教育の発達の中で、ビデオ・テープによる情報の提供は、実地医家、看護婦等に多大の効果を上げる Communication Tool であると期待できる。このためには地域的なビデオ・センターの設置が望まれるであろうし、国家的規模での予算措置を講ずる必要もあろう。また、ビデオ・テープを所有している医学図書館の外部への公開が必要となってくるかもしれない。以上簡単に述べたビデオ・カセットの特性を生かした活動を推進してゆく為には今にも増して質の高いソフトが提供されることがまず第1の前提条件であるし、日本にも1日も早く Japan Medical Audio-Visual Center とでも言うべき機関の設置が望まれる次第である。

(附録1)

東京女子医科大学図書館視聴覚室使用規定

* 開室時間…… 9 : 00~19 : 00 (月一金)

9 : 00~16 : 00 (土)

* 申し込み……図書館カウンターで所定の申し込

み用紙に記入の上、前日までに申し込むこと。

*A. V. Room は図書館内視聴覚資料を利用して学習するための部屋であるので、その他の目的では使用できない。

*利用時にはカウンターに申し出、係員が同行し

て資料をセットする。利用後はカウンターに報告する。

*機材・資料の取扱いには十分注意し、トラブルがあった場合は、すみやかに電源を切って報告する。

（附録 2） 備付資料、機材

*ビデオ・カセット・テープ（医技研制作他）

*語学用カセットテープ（英会話、ドイツ語、医学英語）

*コンピューター入門用テープ

*臨床X線写真診断学大系（全20巻）

*人体組織学スライド他スライド数種

**Video Cassette Player

**Video Monitor

**スライドプロジェクター（2台）、スクリーン

**カセットテープレコーダー（4台）

**シャウカステン

**テープレコーダー（オープン型）

**Recordplayer, アンプ, スピーカー（2台）

（附録 3—1） 東女医大 AV-Room 使用時間月別統計

年 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総 計	月平均
1974									5.5	7.5	0	10.5	23.5	5.9
1975	0	20	14.5	29	27	25.5	108	46.5	31	47	36	50	434.5	36.2
1976	46	625	415	605	29	36	29	2.5	29	54	35.5	16.5	644.5	53.7
1977	41.6	34.75	24.5											

（単位：時間）

（附録 3—2） 東女医大 AV-Room 使用時間月別統計

引用文献

- 1) 図書館ハンドブック編集委員会編：図書館ハンドブック 第4版。日本図書館協会 1977.
- 2) Raymond, S. L., et al. : A retrieval system for biomedical slides using MeSH. Bull. Med. Libr. Assoc. 64(2) : 233—5, 1976.
- 3) 日本医学図書館協会：第46次日本医学図書館協会総会承合事項 視聴覚資料の取扱いについて(東女) pp. 12—17 1975.
- 4) 大阪大学中之島図書館：国内で入手利用可能な医学教育用AV資料リスト
医学教育 6(4) : 293—299, 1975.
6(5) : 353—357, 1975.
6(6) : 439—444, 1975.
7(4) : 272—273, 1976.
7(6) : 385—393, 1976.
- 5) 商戦だけ先行のVTR 朝日新聞夕刊 6月7日
- 6) Crawford, Susan. Chapter 7. Audiovisual materials. in Handbook of medical library practice. 3rd ed., ed by Annan Gertrude L. MLA, pp. 222—240, 1970.
- 7) Escobar-Sobrinho, Hipolito : Audio-Visual materials and rural libraries. Unesco Bull. Libr. 26(1) : 8—12, 1972.
- 8) 黒岩高明：視聴覚資料論序説，図書館短期大学紀要 No.8 : 53—64, 1974.
- 9) Heidel, Stephen : Medical student assessment of videocassettes in psychiatry. J. Med. Educ. 50(9) : 908—910, 1975.
- 10) Lieberman, James : The Videorecord : Newmode for learning. Bull. Med. Libr. Assoc. 60(1) : 22—25, 1972.
- 11) 大久保逸雄：アート・ドキュメンテーション。びぶろす 18(6) : 9—17, 1967.
- 12) 岩村総一：図書館と視聴覚資料の将来。図書館雑誌 65(8) : 434—438, 1971.
- 13) Vasilakis, Mary : Video as a service in special libraries : a videotaped presentation. Sp. Lib. 64 : 351—4, 1973.
- 14) Multimedia : Cataloging, indexing, and inventory function. J. Med. Educ. 46(7pt.2) : 51—57, 1971.
- 15) Boss, Richard W : Audio materials in academic research libraries. Coll. & Res. Lib. 33(6) : 463—468, 1972.
- 16) Kylberg, Anna-Maria : Audio-visual materials and the public library. Unesco Bull. Libr. 27(6) : 324—330, 1973.
- 17) Iglesias, Celina Munin : Audio-visual material and libraries. Unesco Bull. Libr. 27(6) : 285—290, 1968.
- 18) Kronick, David A : Nonprint media as information resources : software and hardware. Bull. Med. Libr. Assoc. 62(1) : 19—24, 1974.
- 19) 藤川正信：大学における視聴覚教育。薬学図書館 6(1) : 2—4, 1961.
- 20) Trebble, A. : Progress in documentation : Non-book materials ; the control of non-book materials in the United Kingdom. J. Doc. 28(2) : 151—159, 1972.
- 21) 高桑康雄：Ⅲ 大学図書館における視聴覚資料の収集・整理・利用。学術月報 24(11) : 648—655 1972.
- 22) Campbell, H. C. : Media for the man in the street. Unesco Bull. Libr. 27(6) : 316—323, 1973.
- 23) Smith, Bruce H. : The Slide. Ann. N. Y. Aca. Sci. 142 : 440—445, 1967.
- 24) 荻 昌朗：映画フィルムのドクメンテーションとパターンマッチングによる検索。ドクメンテーション研究 18(6) : 191—198, 1968.
- 25) Harris, Jerome J. : Television as an educational medium in medicine ; an historical purview. J. Med. Educ. 41(1) : 1—19, 1966.
- 26) 高橋正明：大学における視聴覚センター。私立大学図書館協会会報 23 : 1—15, 1961.
- 27) 阿字川和雄：合同研究会のその後 —1975年度展望一。医学図書館 22(2) : 122—129, 1975.
- 28) 古沢賢一，酒谷美穂：医学図書館における視聴覚機材。医学図書館 20(1) : 27—32, 1973.
- 29) 青木孝雄：医科大学における総合映像情報システム—その前提条件について—。映像情報 7(5) : 55—59, 1975.
- 30) 三浦 茂：日本ではなぜVTRが普及しないか。医学教育 6(4) : 284—287, 1975.

- 25) Brantz, Malcolm H. : Bibliographic controls for audiovisuals : Recommendations based on response to a questionnaire in the field of nursing education. Bull. Med. Libr. Assoc. 64(1) : 57—60, 1976.
- 26) 渡部満彦 : 資料の整理と保管 (6)整理と保管〔Ⅳ〕その他の資料. 情報管理18(10) : 853—860, 1976
- 27) 特集 図書館と視聴覚 : 丸善ライブラリーニュース No.86, 1972.

(昭和52年7月6日受付)

MLAだより —国際協力委員会報告—

MLAの国際協力委員会（ICC）はシアトルのMLA総会に平行して開催され、その概要が届いたのでお知らせします。

1. 1978/79年度のICCの主要な機能は次の通りである。

- (1) MLAと他の国内または多国間グループとの合併を実行する。
- (2) 1978/79年度のカニンガムフェロー2名を選考する。と同時に本年度決定した2人のフェローの受入準備をする。
- (3) 1980年9月ユーゴスラビアで開催される第4回世界医学図書館員会議の計画について、Scott Adams氏と共働する。
- (4) 米国・カナダ以外の保健衛生科学図書館（health sciences libraries）の名簿を編さんする。
（注：日本医学図書館協会加盟館名簿は、1976年7月に送付した。）

(5) 重複図書資料の再配分と International Libra-

ry to Library Cooperation プログラムとの研究をおこなう。

(6) 外国からの訪問ライブラリアンに対し、旅行日程を作る。

2. 1977/78年度のカニンガムフェローについては、14か国21名の正式応募があり、次の2人に決定した。Miss Susan Ann Flegg, Rhodesia（1年コース）Mrs. Maria Dulcinea Travares Nunes, Portugal（6か月コース）

（注：そろそろ日本に順番が廻って来そうな予感がするので、来年度日本から何人か応募していただきたい。募集要綱は当方にあります）

3. 1978年のMLA総会は6月にシカゴで、1979年は同じく6月にホノルルで開催される予定である。日本からの多くの参加が期待されている。

1977年10月18日
（国際協力委員、国立ガンセンター
図書館 本田 品子）